

初対面の3人会話におけるあいづち —ラポール構築の観点から—

大 塚 容 子

Back-channels in the Conversation among Three Persons —Perspective from Rapport Building—

Yoko OTSUKA

Abstract

The purpose of this study is to examine how three Japanese males use back-channels in two kinds of first-encounter conversations, and to analyze the relationship between the use of back-channels and rapport building.

In one conversation, one person naturally takes a listener's role and keeps using back-channels. His behavior seems to lead to rapport building. In another conversation, one person never uses back-channels and the other persons use back-channels only sometimes. It seems that they do not pay attention to rapport building in the conversation.

Key words

back-channel, listenership, rapport building

はじめに

日本語のコミュニケーションの特徴の一つとしてあいづちを挙げることができる。水谷（1983）はこのあいづちを打つという聞き手の反応に着目し、日本語の会話展開を「共話」と呼び、「対話」と区別した。対話では、会話参加者 A が情報を要求すると、会話参加者 B が情報を提供するというように、会話が進行していく。一方、共話では話し手の発話の間に聞き手が頻繁にあいづちを打ったり、話し手の発話の途中に聞き手がその発話の後半を予測して発話したりする。このような聞き手の反応は話し手の発話内容を共有しながら、会話を展開していくのに重要な役割を担う。

ところで、会話参加者が二人の会話では、一人が話し手になるともう一方が自動的に聞き手になる。話し手と聞き手が自動的に決まるわけである。会話参加者が3人になった場合、話し手はどのように決定されるのであろうか。また、一人が話し手になると残りの二人はどのような言語行動をとるのであろうか。熊谷・木谷（2010：6）は会話参加者が3人以上になると、様々なタイプの相互行為が会話参加者間に見られると述べている。

本稿では、このような多様な言語行為が生まれると思われる、初対面の男性3人による日本語会話におけるあいづちの現われをラポールの構築という観点から考察する。まず、あいづちについて述べ、調査方法を説明する。次にあいづちを量的・質的に調査分析し、ラポールの構築との

関係を考察する。

1. あいづち

堀口 (1997: 42) は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義している。そして、あいづちを広義に解釈して、繰り返し、言い換え、先取り発話もあいづちと同じ機能をもつものとしている。繰り返しとは、話し手の発話の一部、あるいは全体をそのまま繰り返すこと、言い換えは話し手の発話と同じ内容のことを他の言葉に換えて言うこと、先取り発話とは話し手の発話が終わっていないときに、聞き手が話し手の発話の続きを推測して発話することである。「話し手から送られた情報を共有」するという点においては、繰り返し、言い換え、先取り発話もあいづちと同様の機能をもつと考えられる。これらはあいづちよりもより積極的に話し手の発話に関わることになる。

本稿では大塚 (2009) に倣い、あいづちを3種類に分類する。すなわち、①非語彙的あいづち、②語彙的あいづち、③繰り返しである。非語彙的あいづちとは、「ああ」、「ええ」等の短い表現、語彙的あいづちは「はい」、「そうですか」等の表現、繰り返しとは話し手の発話内容を繰り返すことである。笑いやうなずき等の非言語行動は扱わない。

2. ラポール

FitzGerald (2003: 19-20) によれば、ラポールはあるコミュニケーションが成功したか否かを判断しようとするときに考慮しなければならない要因の一つである。ラポールが構築された会話には笑いやユーモアが多数存在するという。笑いやユーモアは会話参加者同士の間で協調的關係が築かれなければ生まれないものだからである。

3. 調査

3.1. 調査資料⁽¹⁾

本稿で用いるデータは、約30分間の初対面の3人による日本語会話2種類と、会話終了後に行ったフォローアップ・インタビューである。これらの会話はビデオに録画すると同時にICレコーダーに録音した。フォローアップ・インタビューは一人ずつ個別に行い、ICレコーダーに録音した。

会話参加者はすべて同一の大学院の男子学生で初対面⁽²⁾である。会話のテーマは奈良についてである。長所、短所等、どんなことでも構わないので、奈良について自由に話すように指示した。会話終了後に行ったフォローアップ・インタビューでは、まずアンケート用紙を準備し、会話はうまくできたかどうか、会話は楽しかったかどうか、相手に好感がもてたかどうか、の3点について「はい」、「いいえ」で答えるように指示した。その用紙の記述をもとに、10分程度のインタビューを個別に行った。インタビューの内容は会話参加者の年齢、敬語使用、沈黙等についてである。本稿の基礎資料は会話を文字化した⁽³⁾ものとフォローアップ・インタビューの内容である。

表1はそれぞれの会話の参加者を示したものである。

表1 会話参加者

| データ | 会話参加者 |
|-----|---------------|
| 12 | J13, J14, J15 |
| 13 | J16, J17, J18 |

3.2. 調査手順

非語彙的あいづち、語彙的あいづち、繰り返しをあいづちターン、それ以外のターンを通常ターンと呼ぶことにする。あいづちターンを量的、質的に調査する。

4. 結果

4.1. フォローアップ・インタビュー

フォローアップ・インタビューにおける会話参加者のコメントを以下に示す。

4.1.1. データ12

会話参加者全員がアンケート用紙の三つの質問に対して、「はい」と答えている。

会話参加者全員が丁寧形を用いて話したことについて質問すると、「よほど仲良くない限り年齢には関係なく敬語を使う。」「初対面だから使った。」「敬語を使ったのは癖。」というコメントが返ってきた。また、沈黙について質問すると、「沈黙は苦手。破ろうとする。」「気持ちがよくない。特に親しくない人だと。」「誰かが話すと思った。何とかなると思った。流れによっては話題を出そうとした。」と答えた。

4.1.2. データ13

アンケート用紙の三つの質問についての回答を見ると、会話はうまくできたかどうかの質問に対して、J16は「はい」と答えているが、J17、J18は「どちらでもない」と答えた。会話は楽しかったかどうかの質問に対してはJ17、J18が「はい」と答え、J16は「いいえ」と答えている。相手に好感がもてたかどうかについては全員が「はい」と答えた。J16は他の会話参加者に対して「苦手だが悪い人ではなさそうだった。」とコメントした。J17はJ16のことを「おとなしくてまじめそうだった。」と述べた。J18は「J16には好感をもった。」と述べた。

J16は丁寧形を使用することが多く、J17とJ18は普通形を使用することが多かったのだが、そのことについて質問すると、J16は「顔見知りでないの。」と答え、J17は「親しみを示すために普通形を使った。」と答えた。J18は「J16の丁寧形使用には違和感をもった。」とコメントした。また、J16はJ17の話題や話し方に対して良い印象をもたなかった。J17とJ18は「J16を何とか会話に参加させようと努力した。」と述べた。

4.2. ラポール

二つの会話はいずれもラポールが生まれたかのように見えたが、フォローアップ・インタビューの結果から、データ12ではラポールが生まれたが、データ13では必ずしもラポールが生まれたとは言えないと判断した。

4.3. あいづちターンの使用率

表2は二つのデータにおけるあいづちターン数、通常ターン数、ターン総数、ターン総数に占めるあいづちターン数の割合を会話参加者別に示したものである。

表2から、各会話参加者がどのように会話に参加していたかがわかる。データ12ではJ13とJ14のあいづちターン数、通常ターン数に大きな差はない。ターン総数に占めるあいづちターン数の割合もほぼ同じである。J13とJ14はほぼ同じように話し手になったり聞き手になったりしていたと考えられる。J15のターン総数が最も多いが、その68%があいづちターンである。J15は聞き手として会話に参加していたことがわかる。一方、データ13ではJ16のターン総数が他の二人の会

表2 会話参加者のあいづちターン、通常ターンの使用数

| データ | 会話参加者 | あいづちターン | 通常ターン | 総数 | あいづちターン／総数 |
|-----|-------|---------|-------|-----|------------|
| 12 | J 13 | 29 | 166 | 195 | 14.9% |
| | J 14 | 31 | 185 | 216 | 14.4% |
| | J 15 | 204 | 96 | 300 | 68.0% |
| 13 | J 16 | 0 | 91 | 91 | 0% |
| | J 17 | 17 | 172 | 189 | 9.0% |
| | J 18 | 28 | 166 | 194 | 14.4% |

話参加者に比べて極端に少ない。また、あいづちも全く打っていない。これはJ16があまり積極的に会話に参加していなかったことを表わしており、フォローアップ・インタビューでJ17、J18がJ16を会話に参加させようと努力したと述べていることと一致する。3人の中でターン総数に占めるあいづちターン数の割合が最も高いのがJ18で、その割合はデータ12のJ13、J14とほぼ同じである。ターン総数に占める通常ターン数の割合を比較してみると、J17がJ18を上回っている。このことからJ17が会話の展開をリードしたと考えられる。

次に各会話参加者が使用したあいづちの種類と使用数を表3に示す。

表3 会話参加者の用いたあいづちの種類と使用数

| データ | 会話参加者 | 非語彙的あいづち | 語彙的あいづち | 繰り返し | 合計 |
|-----|-------|----------|---------|------|-----|
| 12 | J 13 | 17 | 12 | 0 | 29 |
| | J 14 | 13 | 18 | 0 | 31 |
| | J 15 | 181 | 21 | 2 | 204 |
| 13 | J 16 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | J 17 | 7 | 7 | 3 | 17 |
| | J 18 | 25 | 2 | 1 | 28 |

データ12ではJ14の語彙的あいづち数が非語彙的あいづち数を上回っている。J15のあいづちの88.7%が非語彙的あいづちである。また、繰り返しも使用している。データ13ではJ17の非語彙的あいづち数と語彙的あいづち数が同じになっており、繰り返しも用いている。J18のあいづちの89.3%が非語彙的あいづちである。

次に、あいづちがだれが発話権をもっているときに発せられたものであるかを検討する。表4、5は各会話参加者のあいづちターン数と発話権保持者（あいづちの受け手）との関係を示したものである。

表4 データ12のあいづちの送り手と受け手

| 送り手 \ 受け手 | J 13 | J 14 | J 15 | 合計 |
|-----------|------|------|------|-----|
| J 13 | 29 | 20 | 9 | 29 |
| J 14 | 5 | 31 | 26 | 31 |
| J 15 | 100 | 104 | 204 | 204 |

表5 データ13のあいづちの送り手と受け手

| 送り手 \ 受け手 | J16 | J17 | J18 | 合計 |
|-----------|-----|-----|-----|----|
| J16 | / | 0 | 0 | 0 |
| J17 | 7 | / | 10 | 17 |
| J18 | 11 | 17 | / | 28 |

データ12では、J15がJ13、J14に対してほぼ同数のあいづちを打っているが、J13とJ14はあいづちを頻繁に打つ相手が異なっている。J13はJ14の発話中に、J14はJ15の発話中にあいづちを打っている。データ13ではJ17はJ16に対するあいづちよりもJ18に対するあいづち数のほうが多く、J18はJ16に対するあいづちよりもJ17に対するあいづち数のほうが多い。しかし、J16の発話量がJ17、J18の約半数であることを考えると、J16に対するJ17、J18のあいづちの頻度は高いと言えよう。

4.4. あいづちの使用状況

各会話参加者のあいづちの使用状況を見る。

4.4.1. データ12

データ12で注目すべきなのはJ15のあいづち行動である。

(1) J15のJ14に対するあいづち

- 7 J14 あの、一応、あの、出身は→
 → 8 J15 ああ。
 9 J14 大阪なんですけど、まあ、奈良に来て、まあいろいろ。
 (学校のチャイムの音)
 10 J14 やっぱり、そのう→
 → 11 J15 ええ。
 12 J14 まあ、大阪に比べたら当然なんですけど、やっぱり、まあ、ま、田舎というか→
 → 13 J15 はあ。
 14 J14 まあ、そういうふうなまず印象が→
 → 15 J15 ああ。
 16 J14 まず一つあって、あと、やっぱりその、歩いたら、お寺とか→
 → 17 J15 はあ。
 18 J14 多いなあっていうのが→
 → 19 J15 ああ。
 20 J14 やっぱり、お寺とあと、まあ、お寺もそうなんですけど、やっぱり古墳ですかね。

(1) は会話の冒頭部分である。J14が奈良の印象を語っているところである。そのJ14の話の間にJ15は頻繁にあいづちを打っている。

次の例はJ13に対するJ15のあいづちである。

(2) J15のJ13に対するあいづち

- 236 J13 鳴き声をまねするっていうのが、すごいですね。
 237 J15 鳴き声(↑)

- 238 J 13 はい。あの、例えば犬とか猫を飼ってるじゃないですか。
- 239 J 15 ええ、ええ。
- 240 J 13 で、いつも同じ場所に夕方→
- 241 J 15 ええ。
- 242 J 13 4時とかぐらいに、あの、こう、同じ場所に、その、電柱に止まって、そのカラスが→
- 243 J 15 ええ。
- 244 J 13 こう鳴いているんですけど、もうカラスの鳴き方って同じ、ねえ、カアカアってこう鳴くのが→
- 245 J 15 ええ。
- 246 J 13 こう、あの、一般的なあれなんですけども、
- 247 J 15 ええ。
- 248 J 13 途中からワンとかですね。
- 249 J 15 えええ。
- 250 J 13 あの、こう犬が、その、例えば犬、
- 251 J 15 ええ。
- 252 J 13 飼ったりすると、
- 253 J 15 ええ。
- 254 J 13 同じ鳴き方をまねするようになってきたんです、だんだん。
- 255 J 14 ああ。
- 256 J 15 へえ。

J 15は上田(2008:69)が指摘するように、J 13に対しても J 14に対しても「発話の断片ごとに」あいづちを打っている。

次に J 13のあいづち行動を見る。次の例はポーズのあと、J 14が新たに話題を提供した場面である。

(3) J 13の J 14に対するあいづち

- 102 J 14 まあ、あと、あれなんですよ。奈良って、あの、タニシあんまり見掛けないんですよ、田んぼで。
- 103 J 13 ああ。
- 104 J 14 あの、北の方はいるらしいんですけど、何かこの辺ではあんまり見掛けないんですよ。あの、大阪の方だったら、田んぼにはジャンボタニシの→
- 105 J 13 ああ。
- 106 J 14 あのピンク色の玉がばあって付いてたりして。あんまり、あの、この近辺は、あんまりいないみたいですね。
- 107 J 13 ああ。
- 108 J 14 何かその辺がちょっと、田んぼをふと見てたときに、何か足りないなと思ったら→
- 109 J 13 ああ。
- 110 J 14 それが。あ、タニシ少ないって。ええ。

102、104、106の J 14の発話の中には終助詞「ね」が使われている。Kita and Ide (2007) は終助

詞とあいづちの関係を指摘しているが、J14の終助詞「ね」の使用があいづちを誘発していると考えられる。

次の例はJ14のあいづちである。ポーズのあと、J15が新しい話題を提供した場面である。

(4) J14のJ15に対するあいづち

380 J15 そうですね。僕は、奈良はやっぱり自然ですかね。

→ 381 J14 やっぱりそうですか。

382 J15 町の中に自然が入ってるっていうのが、やっぱり一番うれしいなということですね。

→ 383 J14 ああ、そうですか。

384 J15 あの、私は学部の方に、あの、名古屋に住んでたことあるんですけどね。

→ 385 J14 はい。

386 J15 そんなときは名古屋の町っちゅうのは、もう、まあ、それもやっぱり大阪と似てるところもあると思うんですけど、都会なんで、もう、町の中で住んでるようになってたんですけども。

→ 387 J14 はい、はい、はい。

388 J15 奈良に帰ってきたら、やっぱり自然があると、まだまだアスファルトで舗装されてるとこじゃなくて、土のところもあるとか。

→ 389 J14 はあ。

390 J15 ええ、町の並木にサクラが普通に、木が立ってるとか、そんながあるんで、やっぱりいいなあと思いますねえ。ええ。

J15も380、382、384、390で終助詞「ね」、「ねえ」を用いている。

4.4.2. データ13

データ13ではデータ12のように「発話の断片ごとに」あいづちを打つという言語行為は見られない。(5)はJ17が昆虫館の話をしている場面である。

(5) J18のJ17に対するあいづち

343 J17 ある意味ホラーやけど。しかもそこ、バスで行ったら1時間に1本ねんからな。乗り遅れたら30分以上待たんとあかんと思う。

344 J18 それはなあ。昆虫ってえ、どうやっぱり標本(↑)置ってるのは。

345 J17 いや、生きもいたで。ミツバチの巣の展示とかあったねん。

→ 346 J18 ほお。

347 J17 大量にいやがった。しかも、ミツバチの巣の前にクモの巣があるという、悪循環や。

348 J18 〈笑い〉でもよう生きられるな。***

349 J17 (ニタリ)、大量に下に転がったけど、大量に生きとったから。

→ 350 J18 うん。

次の例はJ17のあいづち行動である。相手の発話の一部を繰り返している。

(6) J17のJ18に対するあいづち

327 J18 あとはもう東大寺とか、春日大社も行ったな、ついこの間。

→ 328 J17 春日大社。

329 J18 法隆寺とか、薬師寺とかも行ってははずやし。

→ 330 J17 ああ、薬師寺。

次の例はJ16が図書館の本の返却の話をしている場面である。J17とJ18は発話量の少ないJ16が発話するとあいづちを打っている。

(7) J17、J18のJ16に対するあいづち

172 J18 〈笑い〉確かにでも延滞なんかしたらあかんよな。借りてる本を絶対に。

173 J16 けど、おれ3ヵ月ぐらいけったことがある。

→ 174 J17 ああ。

175 J18 何したん。〈笑い〉

176 J16 あの、置いといて、随時忘れてしまって、気付けば家に督促状というのが。〈笑い〉

177 J18 〈笑い〉でも大体それまでに借りにこうへん(↑)そんなに使わへんかった(↑)図書館。

178 J16 図書館、うーん、いやあまり使うことない。

→ 179 J18 ほうか。

180 J16 やっぱりあまり文献で調べるといことがないから。

181 J18 実地で見に行ってるの(↑)

182 J16 実地で見に行ったり、ネットで収集したり。

→ 183 J18 ああ。

J18はJ16の発話に対してあいづちを打つだけでなく、J16を会話に参加させようとして、175、177、181でJ16に質問している。

5. 考察

データ12では3人の会話参加者が平等に発話するのではなく、一人の会話参加者が聞き手になっている。そして残りの二人の会話参加者のいずれかがその時々によって話し手になり、会話が展開されている。(1)ではJ15とJ14の二人会話、(2)ではJ15とJ13の二人会話になっている。J14の発話中、J15が聞き手になり、J13は二人のやりとりに介入しない。同様に、J13の発話中、J15が聞き手になり、J14は二人のやりとりに介入していない。(3)ではJ13がJ14の聞き手になっており、J15は二人の会話に介入していない。(4)ではJ14がJ15の聞き手になり、J13は二人の会話に介入していない。会話参加者は3人存在するのだが、3人が同時に会話に参加し会話を展開しているのではなく、その時々によって二人のグループができ、二人の間で会話が展開される。そして、聞き手になった会話参加者は頻繁にあいづちを打つ。もう一人の会話参加者はその二人会話には介入しない。会話参加者は3人存在しても、やりとりは二人会話のように展開され、もう一人の会話参加者はあいづちを打つこともせず、自分が発話権をとるまで会話には参加していないのである。データ12に関する限り、3人の会話参加者の発話量は均等にはなっていない。会話参加者間の情報量が均等でなくてもラポールが生まれる。聞き手の役割を担い、あいづちを打つ人が存在することが重要なのである。まさに共話的な会話展開である。

データ13では一人の会話参加者が積極的に会話に参加しなかったため、二人の間で会話が展開したが、データ12のように「発話の断片ごとに」あいづちが打たれることはなかった。それはJ17とJ18のどちらかが聞き手に徹するというのではなく、お互いに相手の発話内容に対して自分の経験や感想を述べるが多かったからである。

(8) J17とJ18の会話

- 110 J18 いくらぐらいかかるの(↑)
 111 J16 学園前から@@大学までやと330円とか。
 112 J17 かかるなあ。
 → 113 J18 いや、学園前までだったら、歩いて行くから。
 114 J17 〈笑い〉チャレンジャーやな。意外と遠かったんで、あそこら。
 → 115 J18 40分から50分ぐらいだったら、歩いて行かれへん(↑)こっからやったら大体。
 → 116 J17 いや、おれ昔チャレンジャーしたけど、2時間かかったぞ。結構。坂道多いんだよね、あそこらへん。
 117 J18 うん。
 118 J17 それがつらいところなん。
 119 J18 あそこというか、この近辺坂道ばかりやん。
 120 J17 ああ、多いな。むしろこの大学自体が上やもんな。

交通費が高いというJ16の発話の後、J18は113、115で歩いて行くと述べ、さらにJ17はそのJ18の発話に対し、116で2時間かかったと経験を述べている。

さらに、次の例では新しい話題を提出したJ17の発話に対し、J18は自分の好みをはっきり述べている。

(9) J18の言語行動

- 298 J17 ああそや。地元には霊山寺という寺、知らん(↑)富雄にあんねんけど、霊山寺って知らん(↑)
 299 J16 知らないです。
 300 J18 知らん。
 301 J17 ああ、知らんか。何か6月かな、バラで有名やねんけど。
 302 J16 お寺なのにバラ。
 303 J18 お寺でバラか。それは面白いけど。
 304 J17 そう、バラ。何かバラ園やねん。6月になったら、6月とか9月になったら、バラが一斉に咲くんや。
 305 J18 ああ。
 306 J17 で、そこの名物がバラティーとか。
 307 J18 ああ。
 308 J17 「バラのお菓子。
 → 309 J18 「でも神社で出すもんじゃねえような気がする。
 310 J17 まあ、お寺で、ローズティーはうまいぞ。一度行ったらわかるで。
 → 311 J18 いや、紅茶嫌い。
 312 J17 うえっ。嫌いなんかい(↑)
 → 313 J18 うん。あの香りがいや。
 314 J17 ローズのお菓子もあるぞ。
 315 J18 いや、お菓子ならいいんやけど。
 316 J17 クッキーも
 → 317 J18 紅茶のあの香りがいや。

まず、J17の霊山寺を知っているかどうかの質問に対し、J16もJ18もはっきりと知らないと述べている(299, 300)。そして、J18は305, 307であいづちを打っているが、309で自分の感想を述べている。さらに、311, 313, 317で3回にわたって紅茶が嫌いなことを述べている。

発話量の少ないJ16の言語行動を見てみると、(9)の302でお寺とバラの関係が不思議であることを述べている。また、(7)の173でも直前のJ18の発話内容に対立するような自分の経験を語っている。

堀他(2003)は日本人とアメリカ人が英語で会話をした場合の、日本人とアメリカ人の話題の提供のし方を調査している。アメリカ人は意見や好みを尋ねることが多いのに対して、日本人は経験を尋ねることが多いという。確かにデータ13のやりとりは(5)～(9)が示すように、経験を述べていることが多く、堀他(2003)の調査結果と合致していると言える。しかし、自分の経験を相手の経験とは独立した形で提示するのではなく、相手の直前の発話内容に対立するような形で自分の経験を述べている。新たに自分の経験を述べる時、逆接の表現で発話が始まっていることが多いのである。(7)の173は「けど」で始まり、(8)の113, 116は「いや」で始まっている。

さらに、(9)におけるJ18の言語行動を見てみると、309で「でも」を使って自分の感想を述べ、311, 313, 317で自分の好みをはっきり述べている。重光(2005: 230)は経験を述べることは事実であるので、対立になりくいと指摘しているが、このような経験の述べ方や好みを明確に述べるという言語行動は共感や協調的關係とは対立するものである。

ラポールが構築できたとは言えないデータ13では、一人の会話参加者が積極的に会話に参加しなかった、あいづちすら打たなかった。また、聞き手の役割に徹する人が存在しなかった。そのためデータ12に比べるとあいづち数が少なかった。これらの要素が会話参加者間での協調的關係の構築に影響を与えていると考えられる。

おわりに

初対面の3人会話2種類におけるあいづちをラポールの構築という観点から調査・分析した。一つの会話はラポールが構築できたが、もう一方の会話では必ずしもラポールが構築できたとは言えなかった。ラポールが構築できた会話では一人の会話参加者が聞き手になり、頻繁にあいづちを打つことにより、共話的な会話展開が行われていた。日本語会話では聞き手の役割、すなわちあいづちを打つこととラポールの構築が密接な関係にあることがわかる。もう一方の会話では一人の会話参加者が全くあいづちを打たなかった。残りの二人の会話参加者もあまりあいづちを打たなかった。一人の会話参加者が聞き手に徹するのではなく、互いに自分の感想や経験を語った。その中には対立を生むような情報も含まれていた。このような言語行動とラポールがあまり構築できなかったこととは無関係ではないだろう。

今回はうなずきや視線等の非言語行動は扱わなかった。データ12に見られるような、3人会話で自分が発話権をとるまで会話に介入しない会話参加者の非言語行動がいかなるものであるか、今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。データ番号、会話参加者番号は待遇表現研究会で付けられたものである。

- (2) データ12のJ13とJ15は面識はあったが、話したことはなかった。データ13のJ17とJ18も面識はあったが、話したことはなかった。
- (3) あいづちが調査項目であるため、他の発話者と重なりがあっても独立した行に記す。

文字化の記号について

- 、／。 語尾の音下がって区切りがついたことを示す。
- (↑) 語尾の音が上がっていることを示す。
- 〈 〉 非言語行動であることを示す。
- (文字) 聞き取りが不確かであることを示す。
- *** 聞き取りができなかったことを示す。
- @@ 伏字であることを示す。
- 「」 会話参加者の発話が重なっていることを示す。
- ⌊ 行末の→ あいづちなど相手の発話が一時的に重なっているが、発話が継続していることを示す。
- 語頭の→ 分析の焦点であることを示す。

参考文献

- 上田安希子 (2008) 「意見を述べる談話にみられるあいづちと終助詞」『社会言語学会第21回大会発表論文集』68-71頁
- 大塚容子 (2009) 「母語話者と非母語話者による会話におけるあいづち一日・英語会話の比較一」『岐阜聖徳学園大学紀要〈外国語学部編〉』第48集、95-107頁
- 熊谷智子・木谷直之 (2010) 『三者面接調査におけるコミュニケーション 相互行為と参加の枠組み』くろしお出版
- 重光由加 (2005) 「何を心地よいと感じるか—会話のスタイルと異文化間コミュニケーション」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語学1 異文化とコミュニケーション』ひつじ書房、216-237頁
- 堀素子・津田早苗・村田泰美・大塚容子・重光由加・大谷麻美・村田和代 (2003) 「Faceの普遍性と Discourse におけるポライトネスの表出」第21回英語学会ワークショップ口頭発表
- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子 (1983) 「あいづちと応答」水谷修編『講座 日本語と表現3 話しことばの表現』筑摩書房、37-44頁
- FitzGerald, Helen. (2003). *How Different Are We? Spoken Discourse in Intercultural Communication*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Kita, Sotaro and Sachiko Ide. (2007). Nodding, *aizuchi*, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships. *Journal of Pragmatics*, 39, 1242-1254.

